



1954-1960

## 新人戦・惜しくも優勝を逃す



ついに決勝戦に敗れ2位となる。

左より、中島・高橋・赤井・田淵(18期)・松永・渡辺・吉川(18期)・谷垣(18期)、この他、西沢・森川も出場していた。

### 日体大の佃先輩が指導

高2のときの神戸市高校新人戦で惜しくも神戸高校に負け、優勝を逃した。

我々の時代は六中サッカー部の第2の強い時期を迎えようとしていたと思う。17期は部員数も多くチームワークも良かった。また18期の個性的なプレイヤー数名がレギュラーになっていた。この大会でどうして勝ち上がったのか記憶はないが、決勝は兵庫県の雄である神戸高校との間で長田高校のグラウンドで行われたと記憶している。

当時のサッカーはW・Mシステムで行われ、両フルバックとハーフ・セン

ター(今で言うセンターバック)の3人が後方の守備を固めていたが、自分は馬力を買われてハーフ・センターとして中央の守備に当たっていた。当日は風邪で熱があったが決勝戦ということでそんなことは忘れて戦った。記憶は定かではないが、前半1-1で後半に1点入れられて敗れ準優勝に甘んじた。試合の内容は殆ど忘れてしまったがPKの失敗は覚えている。PKを得たが最初にセンターフォワードでキャプテンの高橋(阪大サッカー部/米国留学、日立製作所入社、若くして病死)が蹴って外したが、相手のキーパーが先に動いたのでやり直しになった。彼はもう一度蹴ったがこれまた外れた。

しかし、またしてもキーパーが先に動いて再度やり直しとなった。そこでインナーで副キャプテンの松永(阪大サッカー部/三井造船)が蹴ったが結局外してしまった。その後終了も近い時間帯に神戸高校の山なりのヘッディングシュートがキーパーの頭上を越えて決勝点になってしまったと記憶している。このPKをどの時点で得たかは覚えていないが多分(1-1)の後半の相当に終わりに近い時間帯ではなかっただろうか。あれが入っていればそのまま優勝していたはずという記憶だけが残っている。

当日は、そんなことは初めてだったが体操専任の友方先生(既に故人/同

じく体育の怖いマッサン…増田先生と比較すると非常に温厚な先生であった。確か息子さんも先輩で大学でサッカーをやっておられ度々指導に来られたことを覚えている)が引率同行され、例によって敬愛する“豚コック”(ヒルケル)さんが大きなカメラを持参された。惜しくも負けたが帰る際に友方先生は試合場の近くの飯屋で皆に熱いキツネうどんをおごって下さった。今ではどうか知らないが、当時は六甲の生徒は映画館に行ったり、外食をするには学校の許可を要したから殆ど外食はしなかったのでよく覚えている。お二人とも既にこの世にはおられないが当時は現在の自分よりも若かったことであろう。優勝していればもっと喜んでもらえたと思う。翌日は朝礼で表彰を受けた。

当時は、毎日練習している他校に較べてもそう弱くはなかったが、大会で上位に食い込めるのは高2の新人戦だけであったと思う。当時の神戸市の高校では名物校長・高山校長の率いる神戸高校が圧倒的に強く正月の全国大会の兵庫県代表には殆ど神戸高校か関学高校が出場していた。しかも兵庫県代表は常時上位に食い込んでいた(全国大会は阪急西宮北口駅の南側の芝生の2面のサッカーグラウンドで行われていた)し、その卒業生は慶応や早稲田のサッカー部で活躍していた。現在と違い大学の方が実業団よりも強かった。その後、この神戸高校の同学年は高3の時に全国大会に出場したはずである。また、当時の灘高も結構強く良きライバルであったと記憶している。その後、我々の指導(?)もあってか後輩は我々の時代より少しずつ強くなっていったと思う。

我々が他校と比較して少ない練習量でそれなりに弱くなかったのは17期は部員が多かったこと、中学時代から早朝殆ど毎日グラウンドでゲームをやり、昼休みも毎日ゲームを行っていたからであろう。初めは昼休みも2段目のグラウンドでやっていたが危険だということでサッカーは禁止になった。それでもやっているとハイカラー・黒服の先生がボールを取り上げにきたことを覚



えている。当時は、まだ山のあった3段目(最下段)グラウンドでやっていたがそこも工事で禁止になった。しまいには最上段グラウンドでソフトボールをサッカーボール代わりにしてゲームをしていた。また、弁当を早食いして(数学のスカタン先生の午前中の授業時間に弁当を食べて怒られたこともあった)すぐに走り回ると、食糧事情も今より悪かったせいか午後の1時限目は眠くて眠くてしようがなく、よく居眠りをした。西洋史の渋谷先生からチョークを投げられても気が付かず居眠りをしていて、後ろの者が起こしてくれたので気が付いて改めて怒られたこともあった。

合宿になると先輩が来られいろいろな指導をして頂いた。中には今から考えると無茶なことも多かった。ある先輩が竹竿に縄でボール(当時は革ひもでチューブ入れ口を絞める面倒なボールであった)を吊るして2人に空中でヘッドを競らせたが、後輩の1人は相手の頭がぶつかり端正な鼻筋を曲げてしまいその後退部した。

また、佃“先輩”(我々からみれば先生ではない。敬称は“ツクツン”)は当時日体大のサッカー部員であったが、自分にとっては当時の関東の野蛮なサッカー(当時は関東は当たりのきついキック・アンド・ラッシュ戦法で関西は華麗なパスワークを主としていた、どちらかという不器用な自分には前者が向いていた)の雰囲気を知る良き“先輩”であった。しかし、あるタイプの者にとっては、体は細いが“コワイお兄さん”であった。夏の合宿でタックルの指導を受けていたが、ある同期の部員(本人の名誉のため名は秘す。阪大サッカー部から石播)の

タックルのやり方が悪く、運悪くボールではなく“先輩”の足にタックルをしてしまった。そこで罰として“先輩”は「オイ赤井、そいつのケツを3回蹴れ」と命じた。躊躇していると“そいつ”はケツをこちらに向けて「早よ蹴れや」と言うし皆が注目しているし、で困惑したことを覚えている。また関東の野蛮サッカーではグラウンドで小石が飛んでくることもあるということも知った。

その後自分も神戸大学サッカー部→大阪スポーツマンクラブ(当時の日本リーグ入りを目指していたが果たせなかった)にある間、度々六甲のグラウンドに赴き後輩を指導したが、彼らがどういう風に思っていたかは今から考えると全く自信がない。

“先輩”はその後六甲の先生になられた。自分が卒業してしばらくしてから、“先輩”が、多くのOBは正月には関西に帰っていることだろうから、正月2日にはOBも集めて“六甲の初蹴大会”をやろうかと、提案され是非やりましょうということで始まったと記憶している。その後10数年は毎年欠かさず参加し千支ワッペンも初回からずっともってる。初蹴会後の現役・OB交流会で、学舎にビールが登場したのは自分のビール好きのせいではないかと恐縮している。交流会の後、“豚コック”の部屋でハムやパンを腹に詰め込みながら部の近況を聞きアルバムを見せてもらいながら友人達といろいろ話したことも懐かしい。

最近は今も御無沙汰していますが、本当にサッカーをやっていた良かったと感謝しています。現役も頑張ってください。

[赤井 平二]